

第3部 災害医療の在り方 ⑧ — 再構築への司令塔①

未来へ

被災地からの提言

24



「亡くなった仲間の思いを決して忘れない」と誓った佐々木亮平保健師。秋田市・日赤秋田看護大

陸前高田市役所2階 時代は県立高田病院の 石木幹人院長(65)らと 協力を、寝たきりや認 知症の予防を目指す 津波で水没した。同市 保健師は、9人のうち 6人が死亡した。

震災1年前の2010年3月まで3年間、 県からの派遣で同市に 勤務していた秋田市の 日赤秋田看護大助教の 佐々木亮平保健師(37) は、看護師の妻宏美さ ん(33)に「陸前高田を 助けに行きたい」と告 げた。

長期支援のためには 大学を辞めなければな らない。幼い3人の子 どもたちを思うと迷い ない。

全てを懸け日本一に

もあつたが心臓を締め 付けられるような思い を抑え切れなかった。

佐々木保健師にとっ て、陸前高田は「第二 の故郷」だ。市保健師 康推進課長が「遅い」

月16日に陸前高田市を 訪れた。

市災害対策本部が置 かれた市給食センター に入ると、菅野道弘健 康推進課長が「遅い」

院臨時診療所を立ち上 げ、国保広田診療所の 近江三喜男院長らと協 力を、主に市の東側 の救護と巡回診療を再 開。

福祉未来会議」を開 催。中長期的な地域包 括ケアの体制づくりを 進めている。玄米ニギ 二ギ体操も復活した。

震災前、佐々木保健 師や石木院長、そして 死んでいった仲間たち が力を合わせて進めて きた、市民一人一人の 健康を目指す活動が少 ない。市民との信頼関係のお かげだ」と感謝する。

同時に「もし、あと 1年市役所で働いてい たら、間違いなく私も 死んでいた」と思う。 だが生き延びた。

「私は、志半ばで逝 った仲間の思いを絶対 に忘れない。私の人生 の全てを懸けて、陸前 高田を日本一のまちに する」と決意する。

同市高田町の第一中 心看護所を構えた藤田 センター長ら日赤医療 班が、同じく主に西側 を担当した。

全体の指揮は石木院 長が執り、日赤がサポ ートした。藤田センタ ー長は「石木先生は確 かに疲れ、傷つしてい たが、あの状況下で市 民が信頼できるのは、 長年市民とともに地域 医療をつくり上げてき た石木先生だけだ。わ れわれ外部の者がどん なに頑張っても、絶対 に取って代わることは できない」と考えた。

さらに、いわて災害 医療支援ネットワーク (本部長・高橋智医 師)が全国から押し寄 せた支援チームの調整 などを行い、現場をサ ポートした。

佐々木保健師も石木 院長と協力しながら、 公衆衛生分野のコーダ インターを担当した。

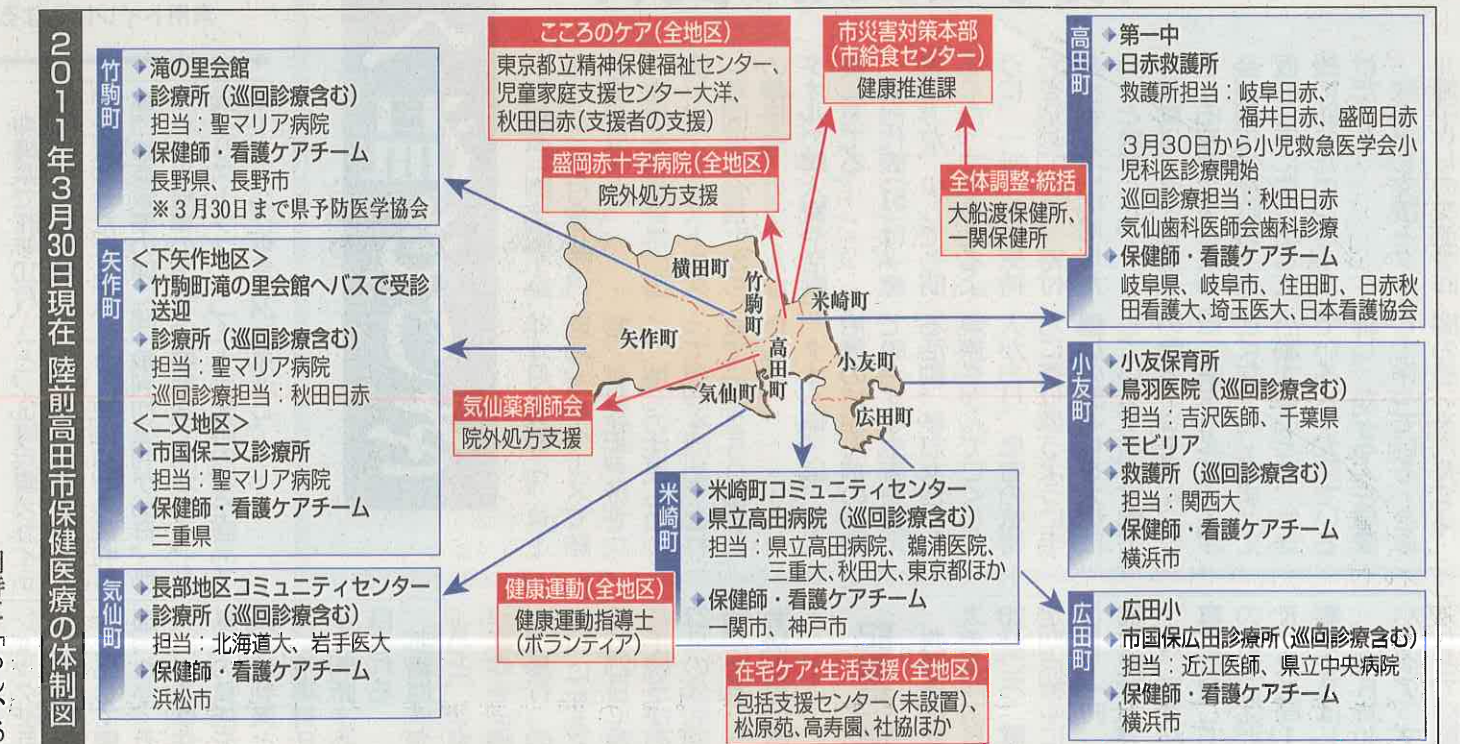
大学が理解を示し、1 年間は毎週1度、今も 月に1度は同市を訪れ て活動している。

避難所の感染症予防 などの緊急対策から始 め、今は「市保健医療

竹駒町 滝の里会館 診療所(巡回診療含む) 担当: 聖マリア病院 保健師・看護ケアチーム 長野県、長野市 ※3月30日まで県予防医学協会

矢作町 <下矢作地区> 竹駒町滝の里会館へバスで受診 送迎 診療所(巡回診療含む) 担当: 聖マリア病院 巡回診療担当: 秋田日赤 <二又地区> 市国保二又診療所 担当: 聖マリア病院 保健師・看護ケアチーム 三重県

気仙町 長部地区コミュニティセンター 診療所(巡回診療含む) 担当: 北海道大、岩手医大 保健師・看護ケアチーム 浜松市



2011年3月30日現在 陸前高田市保健医療の体制図

いわて災害医療支援 ネットワーク 災害派遣医療チーム(DMAT)撤退後、切れ目のない災害医療の提供を目指し、岩手医大と県、県医師会などが設立。全国からの医療支援チーム受け入れに伴う現場の負担を軽減

するため、原則として長期間活動できる団体に限定して受け入れ、計画的に各地へ派遣するなどの後方支援を行った。被災地で活動した多くの医療者が、昨年6月に亡くなった高橋智本部長の献身的な努力に深く感謝している。